
G † C/ontrol code

渡鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GTC / onter code

【Zコード】

N1256B

【作者名】

渡鳥

【あらすじ】

平行世界という言葉がある。世界は一つでなく、可能性という概念によつてまるで大樹の枝のように分岐しているという理論だ。だが、一つ勘違いしないでほしい。世界はあくまでも可能性という磐石の上で成り立つていて言つことを、そして世界は紛れもなく一つであるということも・・・。Tokyo某所、地下15階層。そこにはソウルプレイヤーと呼ばれる者たちが人目を忍んで集まつていた・・・。

episode 0 “墓の交差点”（前書き）

某無料オンラインゲームをベースに書きました。タイトルでピンときた人もいるかもしませんね。世界観とかなので知っている人、めんどくさい人は読まなくてもよいです。後、あくまでもベースにして書いているので勝手なオリジナル感も入っています。タイトルはそのまま、中身は別物ともいえます。

平行世界という言葉がある。世界は一つでなく、可能性という概念によつてまるで大樹の枝のように分岐しているという理論だ。だが、一つ勘違いしないでほしい。世界はあくまでも可能性という磐石の上で成り立つてゐると言つことを、そして世界は紛れもなく一つであるといつても・・・。

Tokyo某所、地下15階層。そこにはソウルブレイカーと呼ばれる者たちが人目を忍んで集まつていた。

ソウルブレイカー・・・彼らがそう呼ばれるのは理由があつた。それは、彼らの力を引き出すカード型魔術兵器“ソウルイーター”的存在である。“ソウルイーター”とは13年前にTokyo地下30階層の奥深く、ロストエリアと呼ばれる場所で発見された。ソウルイーターは携帯電話を媒介とし、持ち主の魂を糧にカードに宿る精霊兵器を具現化させ、呼び出す人類には未知のものであつた。

ソウルイーターは誰にでも扱えるものではない。ソウルイーターに宿る精霊兵器を具現化できる能力を持つ者、それが“ソウルブレイカー”である。

しかし、能力者は魔術兵器によつて絶大なる力を手に入れる反面、彼らは恐ろしい宿命を背負つてゐる。ソウルイーターは強力な兵器であるがゆえに、使用することに彼らの魂を喰らい続ける。そのため、ソウルブレイカー達は生き残るために敵となつた者の魂を力一ドに捧げなければならないのであつた。

生存をかけ、能力者達が血で血を洗つ闘いを繰り広げるためにいつしかそこは、“Grave cross(墓の交差点)”と呼ば

れるようになつていった。

そして、勝ち残つた者のみが入ることを許される、“至高の闘技場”。その闘技場で勝ち残つた者のみが地下30階層に眠る伝説のカード、“G O D”を手に入れることができるるのである。

そして今、Grave crossの表の歴史に埋もれた、決して語られぬもう一つの死闘が繰り広げられようとしていた・・・。

エピローグ 完

覚醒編 episode 1 “炎の出会い”

11月15日（水）深夜11時59分

俺の目の前には炎上したトラックが横転している。この距離では、ブレーキをかけても間に合わないだろう。サヨウナラ、俺。バイクに乗った青年は、燃え盛る炎の塊に自ら突っ込んでいった。

11月16日（木）深夜0時55分

天を焼き尽くすように紅の炎が夜空に向かつて燃え盛っていた。燃えているのは、鉄の塊と化した1セトラックとおまけに中型のバイク、それらから生み出されたように飛び火した炎は周囲の木々を焼き尽くし、その一帯を地獄の如き焦土へと変えてしまっていた。その現場はさながら火炎地獄のようであり、件名は誰もが見ても、立派な人身事故だった。事故原因は居眠り運転をしていた整備不良のトラックがたまたま炎上して横転し、さらにたまたま走っていた後続のバイクが運悪く直撃した、只それだけの何処にでもある話だ。まあ、バイクの運転手には運が悪かったというしかない。はい、ご愁傷様。・・・そんな訳で、バイクの運転手にとつては人生最悪の日になるはずの事故であつたはずだった。

・・・ここまでは、だ。

この事故が普通と違うのは、事情が変わっていたからだ。事故現場では、普通ありえないことが起こっていた。本来なら、今現在、只の鉄くずに変わっているバイクには・・・いや、バイクどころか自動車や飛行機、果ては自転車にさえなければおかしいものが見当たらないのだ。それは、タイヤでもなく、座席でもない。しかし、乗り物に欠かさず存在し、存在しなければおかしいもの、そして乗り物のブレインであり、第2のエンジンともいうべき存在、それは・・・

事後報告（別紙に記載）

事故原因・・・トラックの横転による玉突き事故
被害状況・・・1tトラック1台 中型バイク1台 共に大破（原形留めず）
死亡報告・・・1人
行方不明・・・1人

（浅葱警察署 捜査一課 刑事部長 九頭 住治）

青年が気付いた時には、どこまでも続く暗い回廊に立っていた。壁の燭台には火が燈っているが、申し訳程度に燈るその篝火は、青年の不安をより一層掻き立てる。

――――コツ、コツ

歩き出した青年の靴の音が回廊の中を反響し、闇の中に消えて行く。どこまで行けばよいのかわからない。しかし、それでも青年は歩みを止めなかつた。立ち止まると、耳が締め付けられる程の静寂に悩まされる。それならば、と微妙に響く自分の足音を聞いている方が幾分かマシだからだ。

「・・・おーいーーー！」

どこまでも暗く、すえた臭いのする回廊にて、青年は声を上げた。しかし青年の声は反響するだけで、何の返事も帰つてこない。

「・・・・・」

よもや、夢なのでは？青年はせつ考へた。右手で自分の頬をつねつてみる。

痛い。

じわり、と這い上がつてくるよつソリッジな痛みを感じる。この痛みからすると、どうやら夢ではないことは確かなるようだ。

なつば、ここは一体どこなのだろう。

沸きあがつてくる疑問、青年は自分が何故ここにいるのかを考えてみる。

ああ、そうだ、俺はつっさつき事故つたんだ。確かバイクに乗つてゐる時、前にいたトラックが突然炎上して横転して・・・でも、ぶつかつた瞬間に田の前に光が飛び込んできて・・・。

青年は絡んだ糸をほどく様に、自らに起じた悲劇を思い出してゆく。時間と共に明確になつてゆく記憶。だが、疑問が解決すると共に新たに疑問が生まれた。

「なんで、俺は生きているんだ?」

青年はもつともらしい疑問を口にした。考えてみれば生きているはずがない。自分自身がトラックに直撃したのだ、今頃は体中バラバラのミンチになつてゐるはずだ。回廊を歩く青年は、自らの身の成り果てを想像し恐怖で身震いした。

「理由を教えてあげようか?」

そこへ、背後から声が聞こえてきた。か細く、澄んだ声。恐りく、この回廊でなければ聞こえなかつただろう。青年は、声のするほうに顔を向けた。

「・・・?」

青年の向いた方向、そこには見慣れないものが飛んでゐる。暗くてよく見えにくいが、それは顔つきや体つきこそ人間そのものである。しかし、異様なのは手のひらほどの大きさの体、背中から生やした4枚の羽の存在だ。青年は今までに見たことのない生物を前に腰を抜かしそうになる。

「う、うわわわわわわわ?」

「なつ、失礼ね!—化け物じゃないわよ!—」

化け物を見るように目を丸くする青年に小さな生物は頬を膨らませ

た。暗くてよく見えなかつたが、それはあどけなさの残る少女の顔つきだ。バランスのいい銀髪のショートカットの髪型はおしとやかというよりはクールなイメージを浮き立たせる。その容姿から想像すると、人間で言つならば高校生ぐらいだろうか。しかし、4枚の羽をはためかすその姿は妖精、そんな表現がもつともらしく感じる。

「い、 一体お前はなんなんだ！？」

「まあ、 命の恩人にお前とは『挨拶ね！』

妖精の少女がフンと鼻を鳴らす。外見はクールさを際立たせるが、中身は結構おてんばな性格のようだ。胸の前で大袈裟に腕を組み、口はへの字を結んでいる。

「・・・まあ、 いいわ。私はミ力。 “上総 かずさ 恭介” きょうすけ 君、私はあなたを迎えに来たのよ。」

ミ力と名乗った少女は不機嫌そうに自己紹介をした。

「迎え？」

迎え、という言葉を聞き恭介はミ力に疑問を投げかけた。

「そうよ。恭介君、あなたを “Grave cross” に招待するわ。」

第
1
話

完

Episode 2 “美人は侠気を孕む”（前書き）

前半はコロシアムについてで非常に簡単です。つていうか一話、二話はソウルイーターについてがメインです。

Episode 2 “美人は侠気を孕む”

「ロシアム・・・ソウルブレイカー達が命を削る闘いの場はここでのみ許されている。超古代に存在した魔道科学の結集であるソウルブレイカーの力を100%解放させることができる能力者同士の闘いは、下手をすると相手の命どころか、都市すらも消し飛ばしてしまうほどの力を秘めているからである。そのため、魔道兵器の力を抑える特別な魔方陣を敷いた上に建つこの建物の中でのみ、ソウルブレイカーを利用した戦闘行為は許可されている。

「・・・それが、ロシアムよ。」

今二人の目の前には巨大な建物が立ちはだかっている。恭介にあらかたの事を教えたミカは、最後に彼をロシアムへつれて来た。

「・・・・・。」

恭介は目の前に建つ建物に手を触れてみる。手に伝わる金属とも土くれともつかぬ不思議な感触。どこか温かみを感じるその建物に、彼は大いに興味をそそられたようである。

恭介がここ・・・Grave crossに到着してから一日たつた。その間にミカは彼にこの世界で生き抜く術を身につけさせ、何をすべきかを教え込んだ。最初は半信半疑な恭介だったが、やがて何をすべきか理解したようである。しかし、恭介にはまだ一つだけわからないことがあった。

「なあミカ、『GOD』ってなんなんだ？」

恭介は歩きながら肩にとまつて居るミカに問いかけた。自分がソウルブレイカーだということ、ソウルブレイカーが戦い続ける宿命にあること、ソウルイーターとは何か。知るべきことは全て知った。しかし、わからないのが全ての話に断片的に出てくる謎の単語“GOD”。しかし、彼女はそれを話すことに抵抗があるようだ。今ここで聞くべきか、恐らくは最後に知るべきであろう単語を、彼は思い切つて聞いてみることにした。

「・・・GODはね。まだ誰も見たことがないのよ。」

GODという単語にミカが顔を曇らせる。彼女の表情からは何も読み取れないが、やはり聞いてはいけない事だったらしい。

やはり、聞くべきではなかつたか。

聞くべきではないことを聞いてしまつたことに、恭介は後悔した。二人の間に重い空気が流れ、恭介は重い空気を振り払おうと、話題を変えることにした。

「と、とにかくミカ。今日は何のために商業区に来たんだ？」

商業区とは地下世界にのみ生きるソウルブレイカー達のた

めの生活の場である。地下世界には通貨という概念はなく、ソウルブレイカーといつ証明そのもので何でも手に入れることが出来る。無論、それでは犯罪が多発してしまった無法地帯になってしまふのだが、ソウルブレイカー達の秩序を守る“ファミリー”の存在が無法者の存在を許さない。言つならばファミリーとは、ソウルブレイカー同士の同盟“チーム”を総括するいわば元締めのようなものだ。ファミリーは強大な力を保持しており、秩序を守らない者、裏切り者をファミリー総出で徹底的に殲滅するのである。そんな訳で、地下世界は危ういバランスの上で完璧な秩序を結んでいるのである。

ミカは恭介の肩から飛び出した。

「ソウルブレイカー同士が戦うにはソウルイーターが必要だつているのは判るわよね？今日はそのソウルイーターを手に入れる為にここに来たのよ。」

そう言つてミカは、ある施設の前に立ち止まつた。彼女の立ち止まつた施設の看板には“朝鶴”と書かれている。建物自体は古ぼけており、こじんまりとしているがそれがかえつて歴史を感じさせ、老舗のような雰囲気を醸し出している。

「ハハは・・・呉服屋じゃないのか？」

「大体当たつているけど、ちょっと違うわ。まあ、入ればわかるわよ。」

ミカに促されて店の中に入つた恭介は、その様子に驚いた。内装こそはどこかの呉服問屋のようであるが、店の中いたるところにカードが飾られている。店中に所狭しと飾つてあるカードの大群は、見るものに妙な圧迫感を与えた。恭介は自分が立つているそこが入り

「だとこいつのに一歩も動けず、立ちぬいていた。

「こりゃー。」

店の入り口で立ちぬく恭介に、カウンターから声が聞こえてきた。声の主の方向に顔を向けると、そこには着物を着たロングヘアの女性が立っていた。女性は、恭介に顔を向けにっこりと笑顔を見せている。

「あらあら珍しい、こんなに若いお姉さんが来るなんて。・・・あなたも魂を駆る者なのかしら？」

あくまでもにっこりと、そして丁寧に話す女性。外見から想定するに30歳ぐらいだろう、藍染の着物を着た姿からは見るものに高貴な印象を与える。容姿端麗なその姿はすれ違う者を瞬時に振り返させる程で、俗に言つならば“見返り美人”といつものだろうか。

魂を、・・・駆る？

聞きなれない単語に戸惑つ恭介。と、そこに脇からミカが耳打ちした。

「ソウルブレイカーのことよ。」

恭介に耳打ちしたミカは、そのまま女性の目の前に飛んで行く。

「お久しぶりです、サエ様。」

ミカが女性へ丁寧に挨拶した。

「あら、ミ力ちゃんんじゃない！ひむじぶりね～。元気だつた？」

「はい、サエ様もお元気そうで安心しました。・・・あの、この人が以前話した。」

「あら、じゃああの子がミ力ちゃんの新しいパートナーなの？」

「はい・・・」

と、サエはミ力とそこまで会話をして、入り口にいる恭介を手招きする。こっちへ来い、という意思表示なのだろう。挨拶がしたいのか、それとも彼に興味が湧いたのか。いずれにしても、呼ばれたからには無視をする訳にはいかないだろ？ そう思い恭介はサエがいるカウンターに歩いていくのであった。

「ねえねえ、彼女いるの？」

サエに客間へと通された恭介は、気がつくと質問攻めにされていた。質問はもっぱら恭介自身についてだが、終わることのないサエの質問に恭介は自分自身のことについてでも正直うつとおしく感じていた。そんな恭介の空気を感じ取ったのか、机の上に座っていたミ力がここぞとばかりに話を切り出す。

「サエ様、お話はここまでに・・・。実は今日ここに来たのは日和

話をするためではないのです。」

そう、彼らが今日彼女の元を尋ねたのは、ソウルイーターを入手するためである。決して彼らは目的を忘れていたわけではないのだが、サエの作り出す独特な空氣で言い出すタイミングがつかめなかつたのである。別に彼らは特別急いでるわけではない。だが、これ以上続けると埒が明かないし、なによりも恭介自身が持ちそうにないからだ。

「あらあら、ごめんなさいね。わたしつたらつにお話を夢中になっちゃつて。」

そうこうとサエは立ち上がり、背後にある桐ダンスから一つの箱を取り出しきた。

「あなたたちが欲しいのはこれでしょ？」

サエは黒漆造りで作られた箱の蓋を持ち上げた。箱の中には数枚の紙が納められている。だが、そこに入っているものは白紙。裏にも表にも・・・いや、白紙であるがゆえに裏も表もない両面まつさりな只の厚紙である。

「・・・白紙じゃないか。」

驚嘆が混ざったような溜息交じりの声、期待はずれな箱の中身に恭介は思わず声を漏らしてしまつ。まあ無理もない、散々期待させておいて白紙という結果、ある意味当然の反応とも言える。

「違うわ。・・・見ててね。」

サエはそう言いつと箱の底にある紙を一枚取り出し、なにやら呪文を唱えだした。するとある、さつきまでは白紙であったはずの紙に文字が浮かんできた。

「ふう・・・・これでよし。」

サエは恭介にカードを手渡した。さつきまで白紙だったカードには新たに文字が浮かんでいる。

「Grave cross・・・これが、ソウルイーターか？」

「そうよ。・・・でもまだ完成してないわ。それにはまだこれからあなた自身の魂を封じ込めなければいけないの。」

恭介は手渡されたカードを見る。

「でも・・・・どうやって？」

「・・・それわね？」

サエはそこで話を切ると突然立ち上がった。顔は相変わらず笑つたままであるが、その笑みは最初に見た子供のような無垢な笑みと違ひ、どこか悪戯っぽい裏がありそうな黒い笑みである。しかし、恭介はそれに気づかず飽きもせずカードを見続けている。そして、彼女が恭介の背後に回ったその瞬間である。

ガシツ

女性とは思えないほどの力でサエは恭介の首元を掴み、持ち上げた。突然の事で不意を突かれた恭介は思いもかけずに目を丸くする。し

かし、彼女は笑つたまま表情を変えずに恭介の耳元へ語りかけた。

「「」めんなさいね 」

悪戯っぽく笑うサエは恭介の手からカードを取り上げ、机にそつと置いた。サエは机の上に片足を乗せる。着物の裾から足が露出しているがお構いなしだ。そして、サエは恭介の首を掴んだまま、背中から思いつきり机に叩き付けたのである。

ダーンー！

「「」ふつ・・・・・・・・」

世界が揺らぎ、机に叩きつけられた衝撃で一瞬呼吸が出来なくなる。しかし、恭介は更に衝撃的なもの目にした。

「覚悟はよろしくて？」

そう言つサエの手には日本刀が握られている。

殺される。

恭介の頭の中でシグナルが鳴り響く。しかし本能が危険を告げても、体の痛みが指の一本ですら動くことを許さない。涙があふれ、吐き気を催すほどの恐怖が彼自身の体を包み込む。

「えい。」

気の抜けた声を放ちながらサエが恭介の胸の辺りに刀を突き立てる。混濁した意識の中でさえ、リアルに伝わる異物感と身を裂く痛み。

魂に直接突き立てられたかの様な激痛の中で、彼の意識は徐々に消えていったのだった・・・。

Episode 2 完

Episode 3 “魂響”（前書き）

めいせいくンカルイーターについて終わります。

Episode 3 “魂響”

深い闇の中にゆっくりと墜ちてゆく感覚、口の中に広がる鉄鎧のよつた味。徐々に薄れ行く意識と霞みゆく視界の中で恭介は悟った。

俺は死なんだな。

別に自暴自棄になつたわけではない。つい数分前に起つた事と、今この状況を見ればどんな人間であろうとそう思つだ。

まあ、いいか。一度消えかけた命だ。今更惜しむべきものでもない。

刀を突き立てられた傷口から、じわじわと血が滲み出す。流れ出た血は、客間の畳を汚し朱に染めてゆく。血の流出と共に失われてゆく体温は、まるで恭介の生きようとする意志のようである。

・・・・

思考を止め、恭介は瞳を閉じる。生への諦めなのか、死への覚悟なのか、眠るように横たわるその姿は痛々しくもどこか潔さを感じる。全てを終わらせてしまおつ、意識が遠のき恭介が死を身近に感じたその時である。

「お前に選択肢を与えよ。」

!?

何処からか聞こえてきた声に、恭介はカツと目を開く。気がつけば

そこにはさつきまでの密間はない。周り全てが真つ暗な一面の闇である。しかし恭介は、そんなことに全く動じず声の主を必死に見つけようとある。

「このまま朽ちて物言わぬ骸となるか、浅ましくも生を選び死を踏破するか。」

冷厳にして莊厳、感情のこもらない声。しかし、闇の中に響き渡る声は”なぜか”恭介の生きようとする意志を強制的に叩き起こす。湧き上がる生への願望。

生きたいか、死にたいかだつて？そんなものは、決まって
いる・・・！

何処からか響き渡る声を彼は睨み付けた。さつきまでピクリとも動かなかつた全身に力が入る。

「俺は

」

恭介が叫んだ瞬間、空間に裂け目が入る。雲の切れ目から入り込む太陽の照光のことき光が、裂け目から彼を包み込んだのであつた。

上総 恭介、死を踏破したその魂見せてもらつた。汝を”
魂を喰らつもの”と認めよう。

「・・・・」

ミカは店の縁側で祈っていた。こんなことをしても意味の無いことだと彼女も分かっている、だが何もせずに居られなかつた。

「・・・・」

そんなミカをカウンターの中から見つめ続けているサエ。彼女とてミカと同じ気持ちである。彼にソウルイーターを与えるためとはいへ、彼を貫いたことに負い目を感じていないわけではなかつた。ただ自分のやつたことに対する責任が、ミカと一緒に祈ることを許さない、ただそれだけである。

ソウルイーターを作り出す方法、それは実に簡単かつ残酷なものである。ソウルイーターには職人（この場合はサエ）が作り出した素体力ードに能力者自身の魂の情報、つまりは体を流れる血液そのものを直接読み込ませるのだ。しかし、”手首を切る”とか”指を切る”とか言うレベルの問題ではなく、最も新しい情報、つまりは”心臓”から流れる血液の情報を、直接与えなければならぬ。当然、そこで心臓を失つた人間は血液を失い失血死してしまつただが、そこでソウルイーターの存在が重要となつてくる。

ある人間の血液を読み取つたソウルイーターはその人間の肉体と精神にリンクし、その人間の原動力となるのだ。・・・簡単に言うならば、一度死んだ人間の魂そのものになるということである。能力者はソウルイーターの力で生かされ、ソウルイーターは自らの力を能力者に貸す代わりに、相手の魂を欲する。ソウルブレイカー達がお互いの魂を奪い合うのにはこういった理由があるのである。

「・・・。」

サエはミカの様子を見る。ミカが祈り始めてからもう三時間以上経つ、幾らなんでもそろそろ限界だ。このままではミカのほうが倒れてしまう。そう思い、サエはミカに店の中で休むように言おうとした次の瞬間である。

ドクン・・・

「！！」

サエは新たな命の躍動に似た音を聞いた。思わず立ち上がるサエ、しかしサエが立ち上がるよりも早く動き出したものがいた。

「恭介！！」

ミカである。サエが動くより早く客間に向かったミカは、素早くふすまを開けた。

「・・・！」

ミカがふすまを開け目にしたもの、それは紛れも無く恭介だった。恭介は上半身だけ起こし、遠くを見つめている。が、やがてミカの気配に感ずいたようだ、頭がミカの方を向く。

「・・・ミカ・・・か？」

虚ろな目をしているが恭介はしつかりとミカを呼んだ。恭介に呼ばれたミカの目には、笑顔が溢れる。

バタン。

しかし、ミ力の名前を呼ぶなり再度倒れる恭介。駆け寄るうとした
ミ力の後ろからサエが現れ、ミ力を制する。

「大丈夫よ。失血で氣を失つただけ・・・今はこのままそっとし
ておきましょ。」

サエは恭介を机から床にあおし、布団をかけた、パリパリと乾いた
血が音を立ててはがれ落ちる。そして・・・

「『』苦勞様・・・』めんなさい。」

サエは小さく呟いたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256b/>

G†C/onter code

2010年10月20日13時52分発行